



文化財受賞
シンボルマーク

小丸山古墳群

昭和61年3月

松江市教育委員会



1号填石棺



2号填主体部

例　　言

1. 本書は昭和60年度に松江市教育委員会が、島根県松江農林事務所の依託を受けて実施した小丸山古墳群の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、昭和60年8月19日から同年11月22日までの内、計58日間を要し、それにかかる経費は1,700千円を費した。
3. 発掘調査の組織は、次のとおりである。

委託者 島根県松江農林事務所 所長 本田周藏

受託者 松江市 松江市長 中村芳二郎

主体者 松江市教育委員会 教育長 内田栄

事務局 野津久夫（社会教育課課長） 岡崎雄二郎（文化係長）

中尾秀信（文化係主事）

調査員 中尾秀信 萩雅人（嘱託）

調査参加者 井上節夫 片寄福 佐々木満喜夫 宮廻太郎

宮廻恭 土井功吉 林義徳 宮廻八千代 片寄ミサ子

井上トシコ

4. 発掘調査に関しては、島根県松江農林事務所から多人な協力を得た。
5. 出土遺物については、島根県教育委員会文化課の松木岩雄、三宅博士、広江耕史の諸氏の指導を得た。
6. 本書の執筆、編集は中尾と萩が行なった。

目 次

I 調査に至るいきさつと経過.....	1
II 位置と歴史的環境.....	2
III 調査の概要.....	5
1. 第1調査区.....	5
(1) 1号墳.....埴丘の構造.....	5
遺構.....	7
遺物.....	7
(2) 2号墳.....埴丘の構造.....	12
遺構.....	14
遺物.....	16
(3) その他の遺構.....	16
2. 第2調査区.....	18
3. 第3調査区.....	18
IV 小 結.....	18

文化財愛護シンボルマークとは.....

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である「柱」、すなわち「柱」と「梁」の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこういうものです。



文化財愛護
シンボルマーク

I 調査に至るいきさつと経過

松江市本庄町から西持田町地内にかけて工事中の『北山地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業』の第2期計画ルートの中で、小丸山古墳群（方墳2基）が該当することが判明したのは、昭和59年1月のことである。

ただちに、事業主体者である島根県松江農林事務所と現状保存の方向で協議を行ったが計画ルートの真上に本古墳群が所在し、擁壁などを設置しても保存は不可能であること、ルート変更を行っても数百メートル先で、こんどは太源古墳（直径35mの円墳）にかかる懼れがあることがわかった。

当教育委員会では、すでに昭和59年度の発掘調査計画は完了しており、これ以上の調査は対応出来ない状況であったので、昭和60年度中に発掘調査を行うことで合意した。

小丸山古墳群のうち、調査対象となる 2 基の古墳はいずれも一辺 10m 前後の方墳と思われたが、このほかに丘陵西斜面から須恵器の小片が検出されたこと、2 号墳から 3 号墳に至る尾根上がゆるやかな平坦面を有していることから、この 2か所についても同時に調査の必要があると考えられた。

調査は昭和60年8月19日から着手し、同年11月22日までのうち58日間を費して行った。

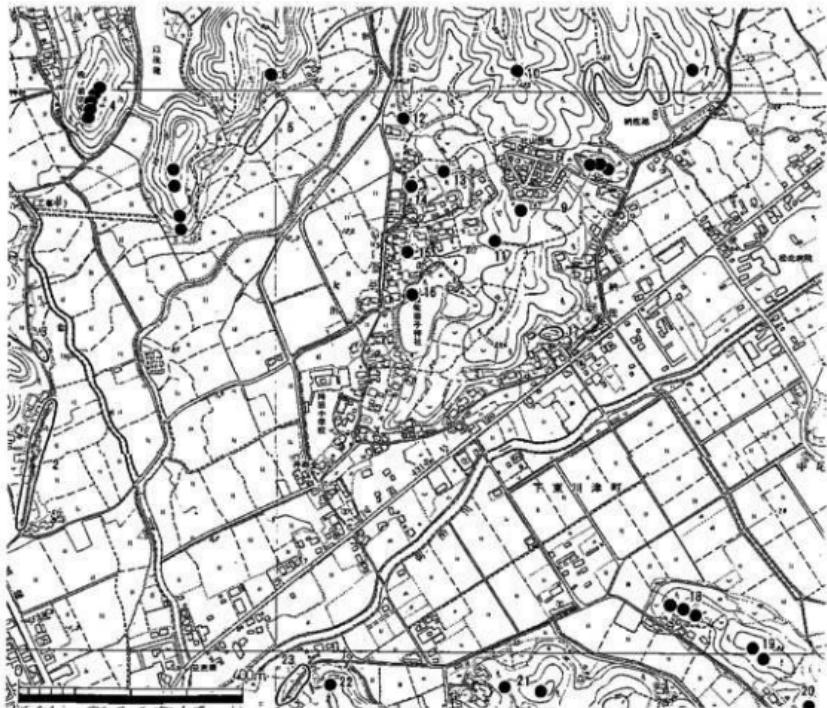


第1図 調査位置図

II 位置と歴史的環境

本古墳群は、松江市の北東部、持田川上流の南北にのびる低丘陵尾根の先端部に位置している。所在地は松江市西持田町字小丸山 1118-1 番地、元の所有者は同町石橋敷氏である。

古墳群は 1 辺 7.5 m～15 m までの 4 基の方墳から成っている。このうち 3 号墳は墳頂部が大きくえぐられ、周間に板状の石材が散乱している。これと対を成すように、以後池をはさんだ西側丘陵上に所在するのが 1 辺 7 m～15 m の方墳 12 基からなる『松の前古墳群』である。墳丘の規模と形状から、本古墳群と同時期に築成されたものと推定される。持田川を境とする東側の低丘陵には、石棺式石室を有する 5 基の『太田古墳群』が点在している。



本古墳群の南側正面には、『持田川流域条里制遺跡』として奈良時代の水田状況がよく残された遺跡が知られているが、当教育委員会で分布調査を行った結果、須恵器片及び縄文式土器片（後期～晩期）が出土した。持田川下流の朝駒川河川敷では、縄文時代の早い段階から多量の土器片が出土していることや、本古墳群の周辺にも他に『城ノ越遺跡』や『納佐池遺跡』などの散布地、『穴の口横穴群』や『鍛冶屋谷横穴』などの横穴墓があることから縄文時代から人々が生活を営んでいたことが推定される。

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	名 称	所 在 地	内 容	備 考
1	小丸山古墳群	東持田 小丸山	方墳 1号-1辺 7.5m 高 1m 2号-1辺 8m 高 1.5m 3号-1辺 15m 高 3m 4号-1辺 12m 高 2m	} S60年度調査済 } 未調査
2	和田上遺跡	西持田 和田	須恵器片散布	
3			遺物散布地-須恵器	
4	松の前古墳群	西持田 松の前	方墳12基	
5	城ノ越遺跡	東持田 城ノ越	須恵器、弥生土器、縄文土器、土師器、黒曜石、木器	S59年度調査済
6	城ノ越横穴	東持田 城ノ越	妻入、須恵器	
7		東持田 納佐	円墳 径 24.5m 高 3m	
8	納佐池遺跡	東持田 納佐	須恵器片散布（蓋坏、平瓶） 方墳 14×10m 高 1m	
9	道仙古墳群	東持田 道仙	古墳 4基 1号 14×9m 高 1.5m、土壤 2号 8×10m 高 1.5m、土壤 3号 10×10m 高 1.5m、土壤、 壇館 5号 16×16m 土壇	
10			方墳 14×10m 高 1m	

番号	名 称	所 在 地	内 容	備 考
11	太田3号墳	東持田 太田	石棺式石室 妻入	野津真宅前古墳と同じ
12	立花横穴	東持田 太田	須恵器	
13	太田5号墳	東持田 太田	石棺式石室 平入	佐々木亮細中古墳と同じ
14	太田4号墳	東持田 太田	石棺式石室 妻入	佐々木浅市宅庭古墳と同じ
15	太田2号墳	東持田 太田	石棺式石室、厨子形木棺、平入	加美古墳と同じ
16	太田1号墳	東持田 太田	石棺式石室、平入、円筒埴輪	加佐奈子古墳と同じ
17	納佐遺跡	東持田 納佐	須恵器片	
18		下東川津	方墳3基 1号 $10 \times 10 m$ 高 $1.5 m$ 2号 $10 \times 10 m$ 高 $1.5 m$ 3号(川津12号墳) $10 \times 8 m$ 埴輪片	
19		下東川津	方墳2基 1号 $5 \times 5 m$ 高 $2 m$ 2号(川津11号墳) $10 \times 10 m$ 高 $2.5 m$	
20		下東川津	方墳 $10 \times 10 m$ 高 $2 m$	
21		下東川津	方墳2基 1号 $15 \times 15 m$ 高 $2 m$ 2号 $10 \times 10 m$ 高 $1.5 m$	
22	貝崎古墳	西川津 貝崎	方墳 $20 \times 20 m$ 高 $4 m$	
23	西川津貝崎遺跡	西川津 貝崎	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、木製品、骨器	

III 調査の概要

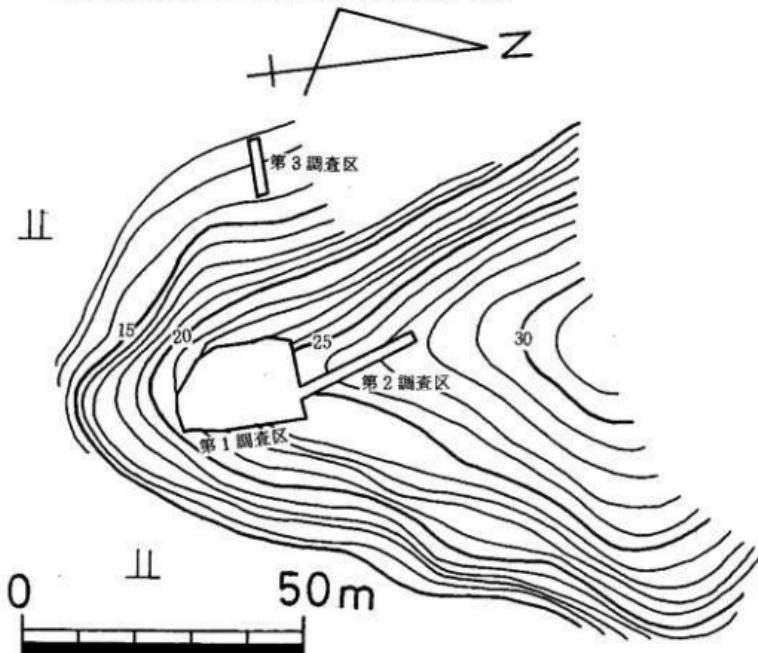
調査の便宜上、古墳及び調査地区の名称を次のとおり統一した。古墳については丘陵尾根の南側先端にあるものから順に第1号墳、第2号墳とした。また、この古墳2基を含む周辺一帯を第1調査区、2号墳から3号墳に至る尾根北側平坦部を第2調査区、尾根の西側斜面平坦部を第3調査区と呼称した。以下はこの呼称に従って概要を記すものである。

1. 第1調査区

(1) 1号墳

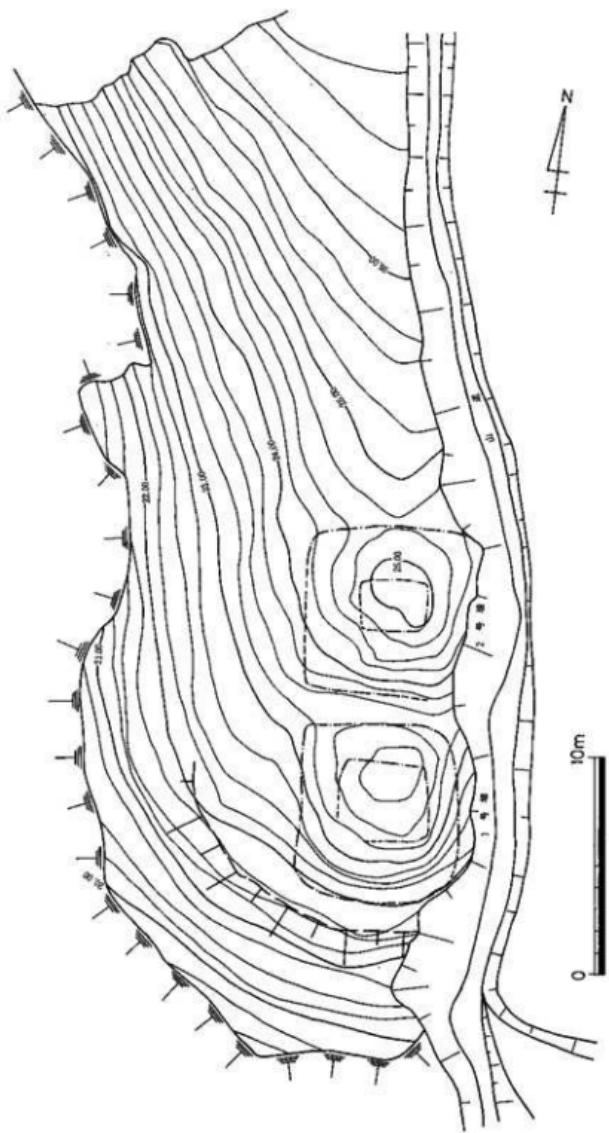
墳丘の構造

南北を縱断する標高約25mの尾根の南側先端部に位置し、測量によれば一辺約7.5m、高さ約1mの方墳で、墳丘の北墳裾2号墳との境には、凹みがあり、周溝があると推定された。墳丘表面には、埴輪、葺石は見当たらなかった。



第3図 調査区設定図

第4図 小丸山古墳群測量平面図



調査の結果、墳丘は地山を切削加工し、一辺が東西7m、南北7.5m、高さ1mの方墳を造り出し、北墳裾から東墳裾、西墳裾のそれぞれにかけ、周溝をめぐらしていた。この周溝は、深さ約40～50cm、上端幅1～1.2m、溝底幅0.6mを計り、2号墳との墓域を区画する。又、東西墳裾には、テラス状の造り出しがあった。墳丘上には、盛土が最高所で50cm盛られていた。

遺構

主体部は、墳丘の南東隅で検出した一種の組合せ石棺で主軸方向は、N14.5°Wである。この石棺は、盛土裾下中より、蓋石の南端が若干露出していた。墓壙は、暗褐色粘質土の固表土に掘込まれ、掘り方は、上端で長辺1.5m、短辺1.1m、下端で長辺1.3m、短辺0.9m、深さ0.2～0.4mを測り、墓壙床面には、何も敷かれず、ほぼ水平で、壁はほぼまっすぐ立ち上がる。墓壙内の組合せ石棺は、両側の側石が土圧によりかなり内側へはいり込み、内法のもっとも狭いところでは、10cmしかない。石棺は側石、木口石とも墓壙床面に浅く溝を掘り、側石が、両木口石を挟み固定していたと推定される。石棺の内法は、長辺1.2m、北側短辺0.2m、南側短辺0.15m、深さ0.2mで、北側短辺がやや広く組合わされている。

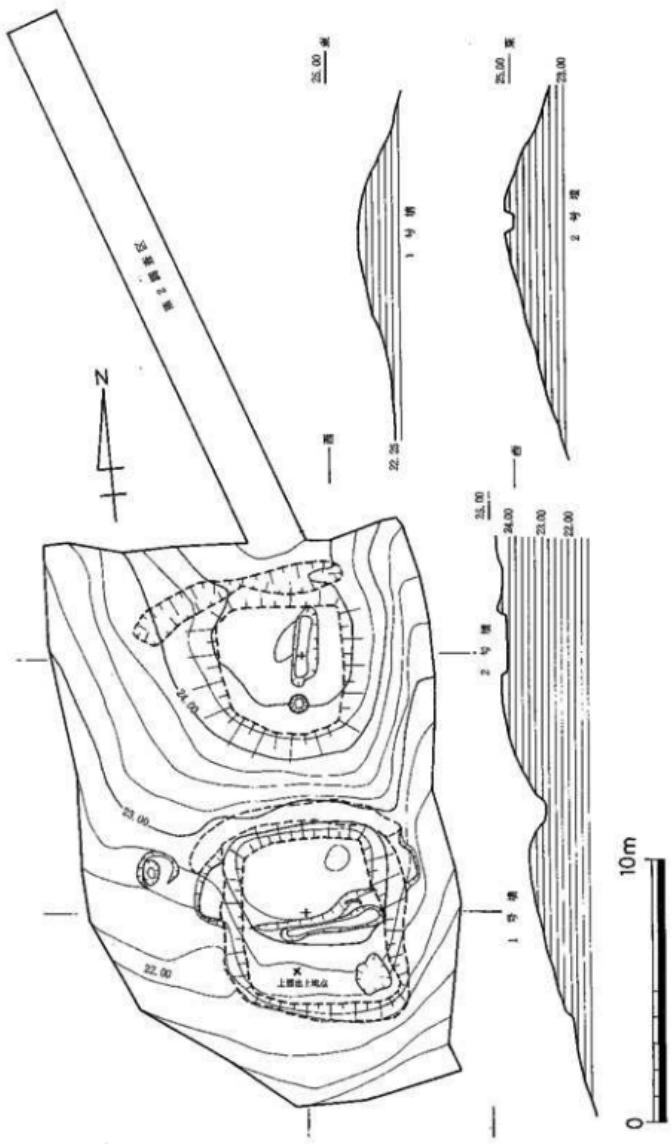
蓋石は、長さ70cm、幅40cm石2枚で構成され、側石とのすき間には、15～30cm程の石を、目どめとして埋め、又、蓋石の上にも接目の部分を中心として角石を置きすき間を埋めるが、粘土などで目張りの痕跡はなく、十分に機能をはたしたとは考えられない。

主体部の他、墳丘中央部を東西に、幅0.5～0.7m、長さ4m程の溝状の落込みが確認されたが、地山面の断割時に検出したものであるため、掘込まれたのが、盛土からなのか地山面からなのかということは、確認できなかった。

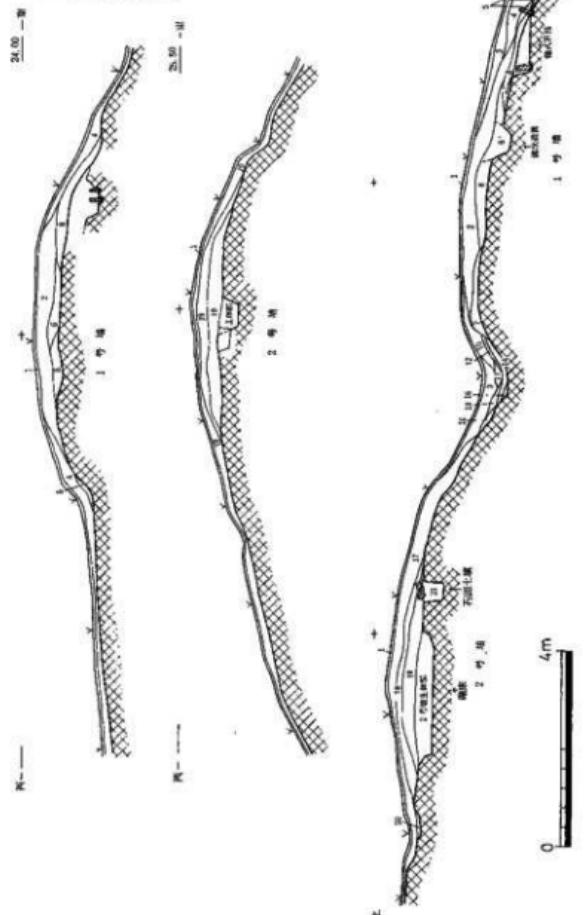
遺物（第9図）

棺内遺物は認められなかった。墳丘中央部からやや西よりの地山面にて上師器が検出された。この上師器は、甕の口縁部で、口径は不明であるが、残存する口縁部と頸部の境のところで徑をとると推定で26.8cmあった。形態は、口縁部がいわゆるくりあげ口縁といわれるもので、直線的にたちあがる口縁部は、かなり肥高する。口縁屈曲部のはり出しあはほとんどない。調整は、磨滅著しく詳細はわかりにくいが、口縁部外面には8条以上の櫛状工具による平行沈線を施し、頸部外面は、横ナデ調整を施す。口縁部内面は横ナデ調整をするが、そこから下の頸部にかけては、ヘラ磨きを施す。色調は、淡赤褐色である。その他、盛土中より、扁平の石が若干検出されたが、石棺築造時の余った石である可能性もある。

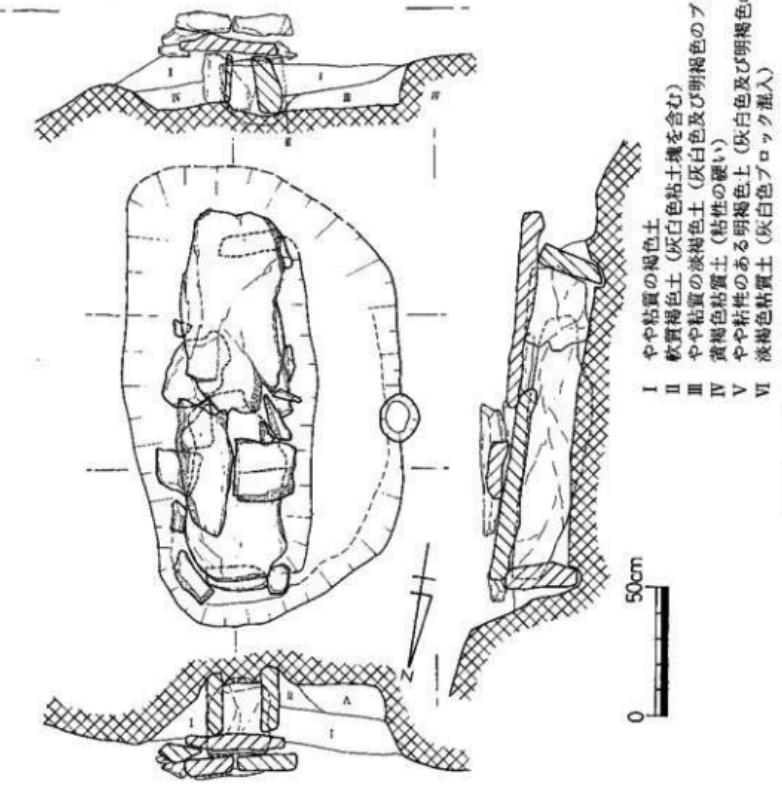
第5圖 調查成果平面圖



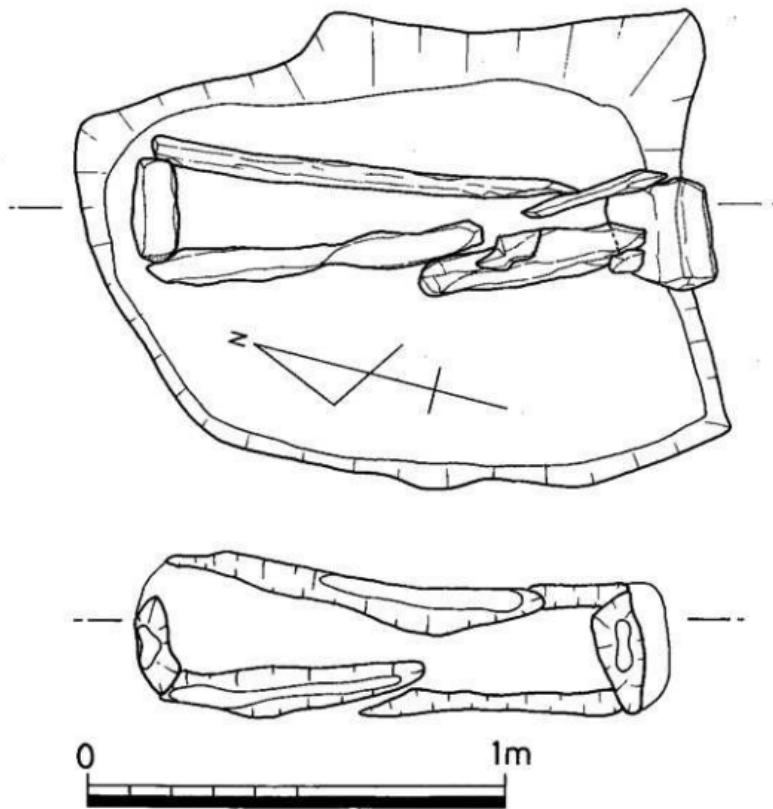
- 1 布岩土
 2 黄褐色土 (薄い色のブロックより2~4cmのもの)を含む
 3 褐色のやや堅めの土 (灰化帶、灰白色の
 ブロックを含む)
 4 灰白色のやや堅めの砂質土 (白色の小ブロックを含む)
 5 白い堅い砂質土 (灰白色のブロック、炭化物を含む)
 6 やや白い砂質土 (白色のブロック)
 7 明るい砂質土 (白色の上)
 8 灰褐色砂質土 (灰表土)
 9 灰褐色砂質土
 10 灰褐色砂質土
 11 灰褐色砂質土
 12 灰褐色のやや堅めの砂質土を含む
 13 灰褐色のやや堅めの砂質土
 14 灰褐色の軟砂土
 15 淡褐色の軟砂土 (白色の小ブロックを含む)
 16 淡褐色の軟砂土 (白色の小ブロックを含む)
 17 灰色土 (白色の小ブロックを含む)
 18 灰褐色土 (白色の小ブロックを含む)
 19 灰褐色土 (白色の小ブロックを含む)
 20 灰褐色砂質土
 21 灰褐色砂質土



第6図 小丸山古墳群断面図



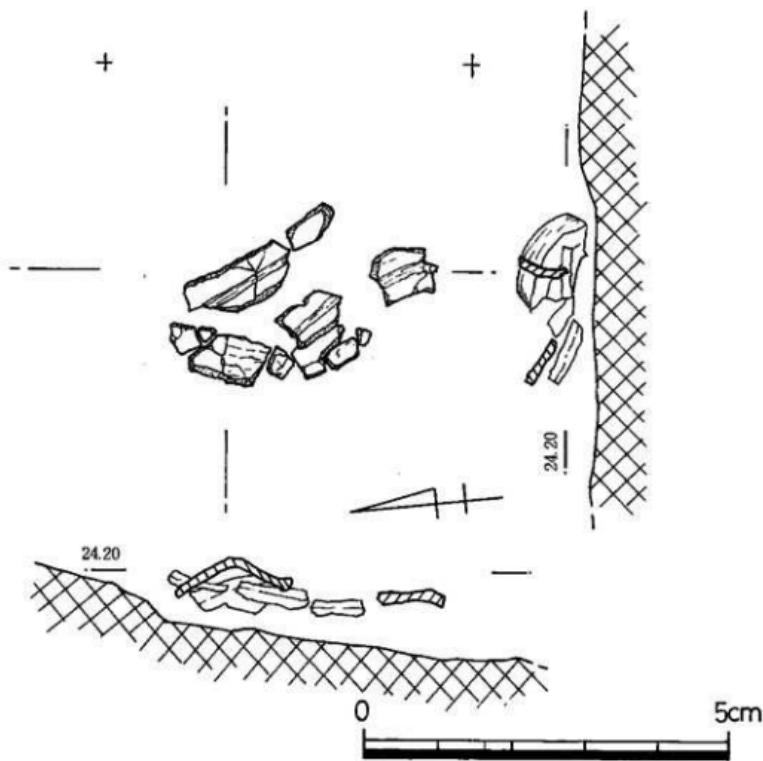
第7図 1号墳主体部実測図(1)



第8図 1号填主体部実測図(2)



第9図 遺物実測図



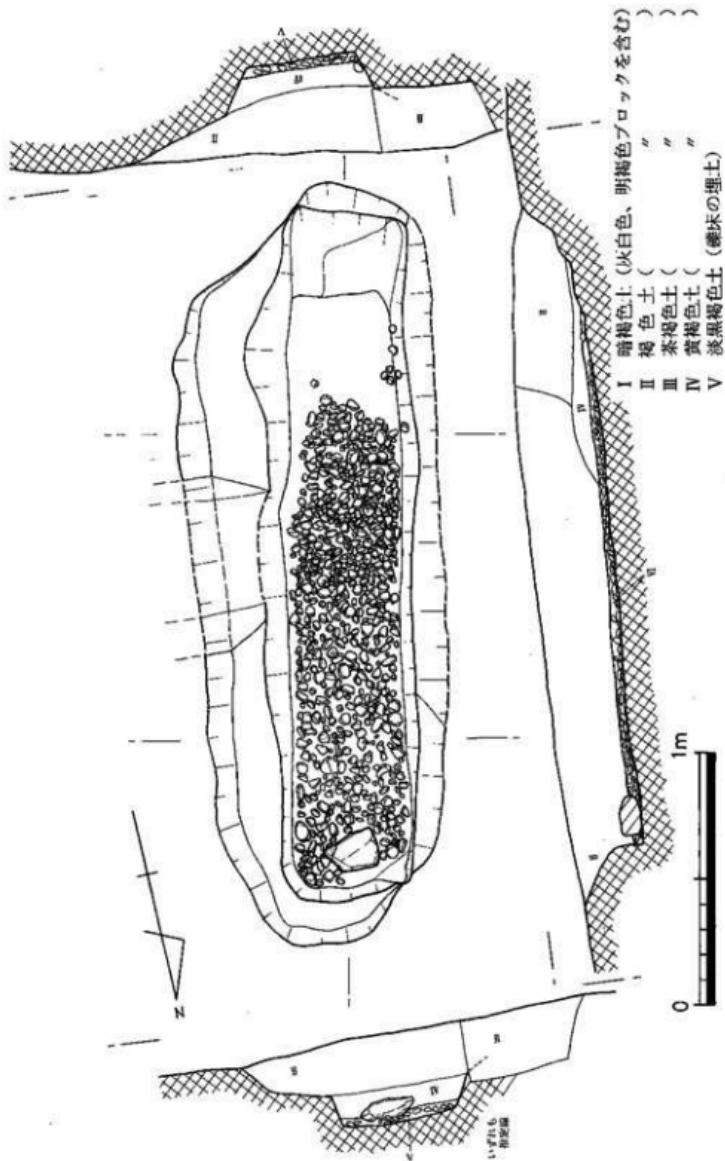
第10図 1号墳土器出土状態

(2) 第2号墳

墳丘の構造

1号墳の北側に位置し、測量によれば一辺8m、高さ約1mの方墳と思われた。墳丘の上には埴輪、葺石の類は見当たらなかった。

調査の結果、一辺が東西約10m、南北約8m、高さ約1.2mの方墳で南側では、1号と溝を共有し、北側を、幅0.6～1m、深さ10～15cmの溝で区画する。こちらも1号墳と同じく地山を切削加工し造営しているが、加工の具合は、1号墳ほど顕著ではなく自然の地形を生かしたものである。盛土は、暗褐色土と褐色土の土を2度にわたって盛



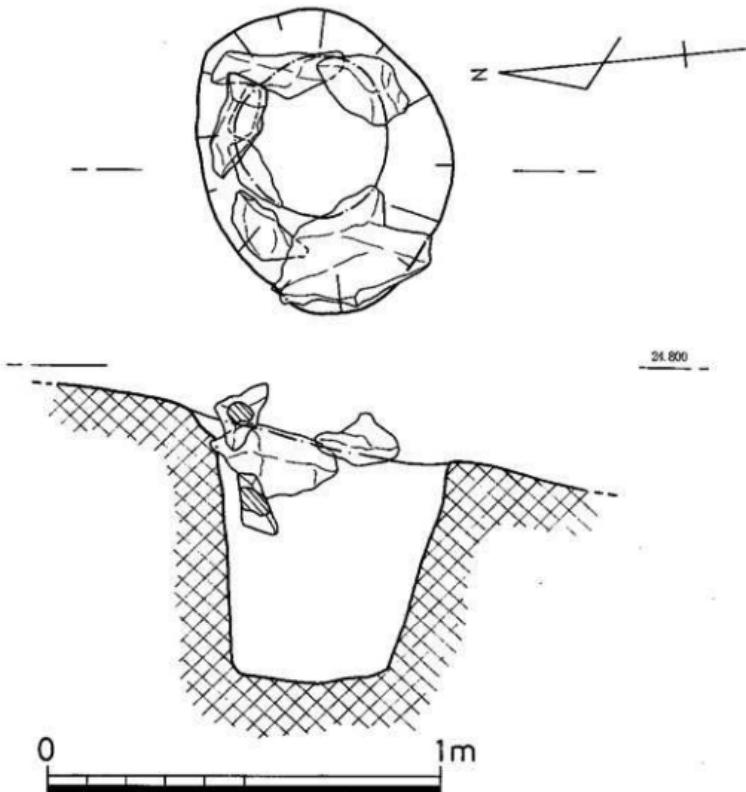
第11図 2号墳主体部実測図

ったと思われ、墳頂部で40cmあった。

遺構

主体部平面プランの検出は、土の変化がわかりにくくてできなかった為、地山断面時に断面から確認した。そのため西側の掘方の状況が不明になったことを記しておく。

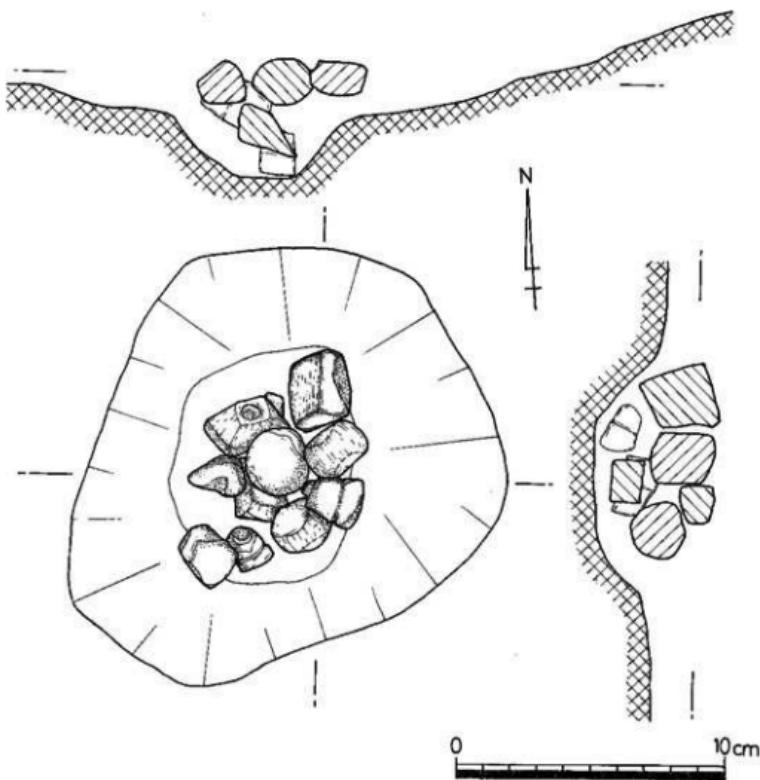
主体部は、墳丘中央部に位置し、主軸方向は、N 5° Eである。地山面から、長さ3m、幅1~1.2mの土壤を掘込み、さらに中央部に長さ2.7m、幅0.5~0.6mの墓壙を設けている。土壤の床面には2~5cmの青灰色の丸い礫が、長さ1.9m、幅0.4~0.5



第12図 2号墳石圈土壤実測図

mの範囲で、厚さ5cmの淡黒褐色土層の中に敷かれており、礫床北側には幅20×長さ15×厚み8cmの枕石と思われる扁平な石が置かれており、被葬者の頭位は北を向くものと考えられる。木棺の痕跡は、断面及び床面で確認できなかったが、礫床の東西両端が、比較的一直線状になっており、掘方との間に、ややすき間があいていることから考え、床面に疊した箱式木棺を安置していたのではないだろうか。

その他の遺構では、主体部の端から、主軸にそって約60cm南側の地点で上端に20cmから大きいものでは40cmある石をめぐらした楕円形の土壙を検出した。この土壙は、主体部と同じく地山面から掘り込まれ、上端径は長径80cm、短径60cm、深さ60cmを計る。石は扁平で土壤の上端より、30cmまでの深さで、重なりあいながら、まわっている。土壤



第13図 五輪塔出土状態

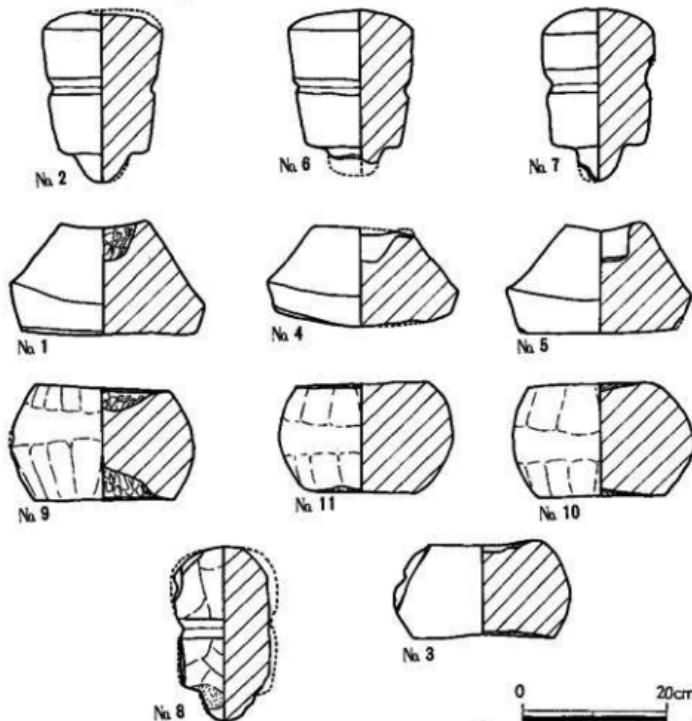
の中には、暗褐色土がつまっていた。この土膜は、主体部と隣接し、同じ地山面から掘下げられていることから、主体部に関連するものと思われるが、その性格は不明である。

遺物

主体部及び、土壤内からの出土遺物はなかった。盛土中に黒曜石のチップが含まれていた。

(3) その他の遺構

表土をはぐと1号墳の西側のはば地山面で、軟質砂岩（米待石という）の破片が3～4ヶ検出された為西側に拡張し、調べたところ、1号墳の墳裾から西へ約3mのところ



第14図 五輪塔実測図

に、地山を掘込んだ径 1.6 m、深さ 0.3 m の円形土壙が検出され、その中に空風輪 4 基、火輪 3 基、水輪 4 基、水輪と思われる破片 2 基、形状不明の破片 53 個が無造作に埋められていた。埋め方からみて、どこか別の場所に積まれてあったものを後世になってこの地に持ってきて、廃棄したのではないかと考えられる。これらの石材も来石で、古墳の裾の方から出て来た石と同質であることから考えて、廃棄されたものの破片ではないかと思われる。尚、地輪と思われるものは、見当らなかった。空風輪は、空輪部の天井部が宝珠形ではなく、丸くなっているが、半に近く、その下は円錐形である。空輪部と風輪部の間に溝状の彫り込みを設け区画し、風輪部も円錐形を呈する。火輪への挿入部は安定している。火輪は、3 基とも幅に較べて高さが高く、3 基ともほぼ 5：3 の割合で、軒反りのカーブも顕著である。空風輪を組み込むためのはぞ穴は、正方形に近く深さは、5 cm 程度あり、しっかりしている。水輪も、幅に較べて高さが高く、これも火輪と同程度の割合になる。表面および天地の凹面にのみ痕が顕著に残る。天地は広いカットになっており、安定している。完存の 4 基のうち 1 基には、梵語かそれに関連するとみられる彫刻があった。

これらの五輪塔は、各輪の簡略化したつくりや形態から近世のものと考えられる。

第 2 表 五輪塔規模一覧

No.	名 称	大 き さ	備 考
6	空 風 輪	空輪部径 17 cm、風輪部径 15 cm、(残存) 全長 21 cm	風化不明
2	"	" 16 cm、" 14 cm、" 24 cm	"
7	"	" 16 cm、" 14 cm、" 24 cm	"
8	"	(残存部) 13 cm、(残存部) 13 cm、(残存) 24 cm	表面破壊著しい
1	火 輪	幅上端 12 cm、最大 25.6 cm、下端 24 cm、高 16 cm	はぞ穴深 5 cm
5	"	" 11 cm、" 26 cm、" 22 cm、" 14 cm	" 4 cm
4	"	" 14 cm、" 27 cm、" 25 cm、" 14 cm	" 4 cm
3	水 輪	上端 16 cm、最大 24 cm、下端 19 cm、高 13.5 cm	梵語、凹面と表面に加工あり
11	"	" 15 cm、" 24 cm、" 18.5 cm、" 15 cm	"
9	"	" 19 cm、" 25 cm、" 19 cm、" 16 cm	"
10	"	" 17 cm、" 25.5 cm、" 17.5 cm、" 16 cm	"

その他実測不可能な破片

水輪片と思われるもの 2 個
形状不明 5 個

2. 第2調査区

2号墳の北側に、長さ20m、幅8~10mの比較的に平坦な部分があり、古墳に関連する遺構がある可能性がある為、長さ2m、幅22mのトレンチを設定し、調査した。

調査の結果、表土から約50cmで地山面に達し、褐色土層が埋土としてあった。このトレンチから地山面の10cm上から土師器の細片が出土したが、遺構は確認されず、調査をうちきった。

3. 第3調査区

古墳を築造した尾根の西側斜面の裾部で、調査前に須恵器の糸切底のものを採集したため、長さ10m、幅20m程の平坦面に10×2mのトレンチを設定し、調査した。

調査の結果、トレンチ内からの遺構は検出されず、古墳末~奈良時代くらいの須恵器細片が若干検出されただけだった。

IV 小 結

第1号墳

1号墳より検出された箱式石棺は、板状に縦理する石を素振りの土壤の床面を浅く掘りくぼめたか、または、勢いをつけて数回落し固定し、それらを組合させて棺とする。もとの状態を推定すると規模的には、 $1.5 \times 0.5 \times 0.4$ [m]程の小型のもので、山本清先生の分類しておられる山陰地方の石棺のIA類に属するものである。^{注9}周辺で箱式石棺の類例を求めるとき、鹿島町の奥才古墳群に6基（うち5基は、棺底部に礫を敷く）、宍道町の足頭2号墳^{注2}、等がある。これらの時期は、いずれも古墳時代前期から中期にかけてである。山陰地方東部においては、出雲地方西部や石見地方にみられる弥生時代に遡る例は今までのところ知られておらず、上限は、古墳時代の前期と考えて良いと思う。^{注4}下限については、須恵器を副葬するものも知られ、古墳時代の後期までくだる。これによつて、1号墳の箱式石棺の時期を考えると、棺内、棺外からの遺物が皆無の為、広い幅でしかおさえることができないが、上記の例から古墳時代前期から中期、下っても後期初頭までの段階と考えたい。

さて、1号墳で問題となるのは、墳頂部から出土した土器の時期がかなり古いたことと、何故石棺が墳頂部中央ではなく、南東隅の方に設置されたかということである。土師器は地山面から、まとまった形で出土した。肥厚した口縁部や、内面のヘラ磨き調整から

考証的場式の時期くらいまで遡るのではないかと考えられる。しかし、検出状況が、旧表土と考えていた暗褐色粘質土を除去後出土した為、1号墳に直接関わるものとは、^{注6}考えにくく、古墳築造以前に埋ったものではないかと思われる。

もう1つの石棺の築造場所の問題であるが、これは、主軸と直交し、墳頂部を東西に横切る溝状の落込みと関連させて考えたい。この溝状遺構は、前記したとおり、断削時に確認したため、掘込みの層位がはっきりしないが、もしこれが6(地山の上層)の層(図-6)から掘込みならば6と6'(溝の埋土)は、7、8の旧表土から掘込んだ2段掘の土壤基の可能性も考えられる。規模からみても幅が0.5~0.7m、長さが4mと充分なものである。遺物もなく、断面もややU字形を呈しているのでそのように断言するわけにはいかないが、もし主体部であれば、これを避けるためにわざわざ墳頂部の南東隅へ石棺を築造したとも考えられる。また、溝であるとすれば、別にもう1つ主体部を造る事を想定してそれと区画する為であるとも考えられるが、墳頂部の遺構は、石棺と溝状の落込み以外には確認できなかったのではっきりした性格は何ともいえない。

以上記した事は、あくまでも想像の域を出ない。しかし、別の主体部があったか、又はそれを設定することを想定し、墳頂部の隅の方へ石棺を築造したと考えるのが一番近いのではないだろうか。

第2号墳

2号墳の礫床は、2段掘込の土壤の床面に1.9×0.5の幅で敷かれたもので、規模的には、さほど大きくない。周辺で礫床を有する箱式木棺墓を求める^{注7}と鹿島町奥才古墳群^{注8}鹿島町の中の津古墳、斐川町結13号墳、松江市古曾志5号墳、松江市金崎6号墳等がある。しかしこれらは、いずれも、遺物が乏しく、時期の決定できるものは、わずかしかない。礫床は、今のところ県内では、弥生時代には、その類例はなく、上限は古墳とされている寺床1号墳に求めることができ、下限は、後期の古墳からの出土例はないことから、おおよそ古墳時代の前~中期にかけて築造されたと考えたい。そうするとこの古墳の時期もその間に造営されたと考えてよいと思う。又、床に敷かれた礫は、貞岩又は砂岩質で、直徑2~5cmのもので、円摩がすすみ円板状のものもじる。2号墳の主体部の南側にある配石土壤は、掘込面が主体部と同じ地山面からであり、場所的に非常に近い為、主体部の関連遺構である可能性が強い。当初、副室的な役割をするか、土壤状の墓ではないかと考えたが、遺物は検出されなかった。円形の土壤状の墓の類例が不明の為、その性格について充分な理解ができなかった。

さて、1号墳と2号墳の前後関係であるが、1号墳と2号墳の間の溝の埋土断面では、それを確認する層位関係を見出すことはできなかった。また、1号墳、2号墳ともに遺

物が乏しいため、広い幅でしか、築造年代を考えることができなかつた。よつて、2つの古墳の築造年代はさほど開いていないという程度のことしかいえず、2つの古墳の前後関係までは言及できない。

この小丸山1号、2号墳は、その後この持田地域に多く出現する石棺式石室を有する古墳に先行する古墳として重要な意味を持っている。この古墳を造営した集団が、後の古墳を造営した集団とどの様に開っていくのかは、資料の増加を待つて再び検討したい。

尚、この報告書を作るにあたつて、島根県文化課、鹿島町教育委員会、宍道町教育委員会、斐川町教育委員会の担当者の方々に御指導、助言をいただいた。記して誠意を表する次第である。

注1 山本清「山陰の石棺について」『山陰古墳文化の研究』1970

注2 鹿島町教育委員会『奥才古墳群』1985

注3 墓壇内で石棺の上面の埋土から古墳時代前期の土師器が出土（昭和60年度宍道町教育委員会調査）

注4 出雲市西谷番外2号墓（門脇俊彦「西谷墳墓群」「出雲、上埴冶を中心とする埋蔵文化財調査報告」島根県教育委員会1980）や瑞穂町の順庵原1号墳（門脇俊彦「順庵原1号墳について」『島根県文化財報告』第7集1971）などがある。

注5 喰ヶ谷1号墳（松江市教育委員会『喰ヶ谷古墳群』1981）や臼畠古墳（島根大学考古学研究会『菅田考古』第16号1983）がある。

注6 的場土壤裏から出土の土器に顯著なヘラ磨きがみとめられる。（近藤正、前島己基「島根県松江市の場土壤裏」「考古学雑誌」57巻1号1971）

注7 2に同じ（礎床13例のうち、木棺は7例）

注8 この古墳の主体部は、箱式木棺に石蓋を置く。出土遺物として曲縁などがある。（昭和60年度鹿島町教育委員会調査）

注9 棺外遺物として、棺の横から鉄剣が出土（昭和59年度斐川町教育委員会調査）

注10 「古曾志遺跡現況資料」1986（昭和60年度島根県教育委員会調査）

注11 松江市教育委員会『史跡金崎古墳群』昭和53年

注12 東出雲町教育委員会『寺床遺跡発掘調査概報』昭和58年



遠 景



調査中（表土掘削）



盛土観察用畦を残した状態



1号墳墳丘基盤



1号墳地山断面後



石棺の掘り方

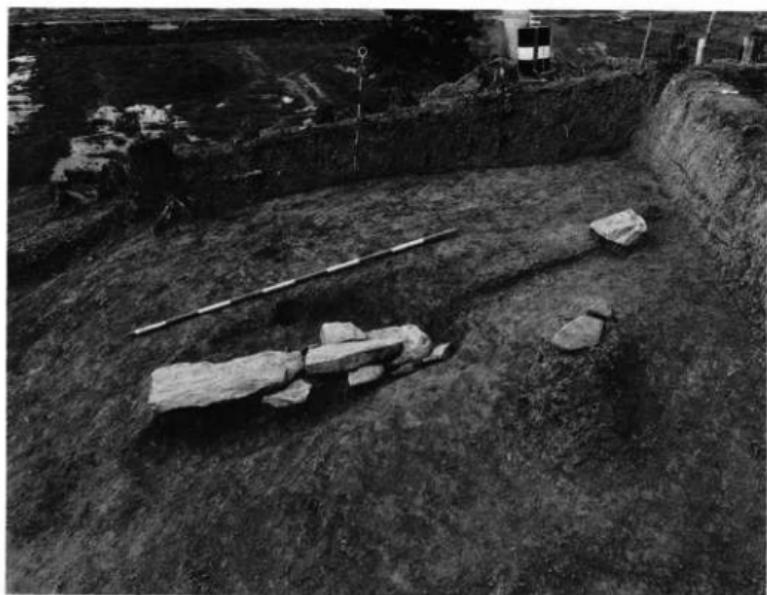
同上(南からみる)



1号墳石棺検出状況



石棺検出状況



石棺と墳丘の関係



石棺の位置



石棺検出状況



石棺 北部



石 棺 南 部



詰石除去後の石棺



蓋石除去後の石燈（北－南）



蓋石除去後の石燈



石棺と墳丘の関係



石棺材除去後の掘り方



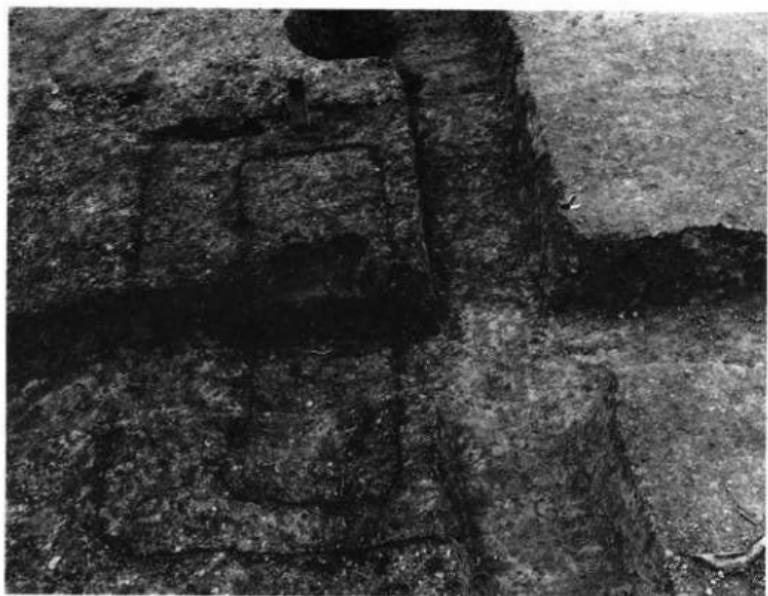
2号墳←

1号墳と2号墳の中間溝断面

→1号墳



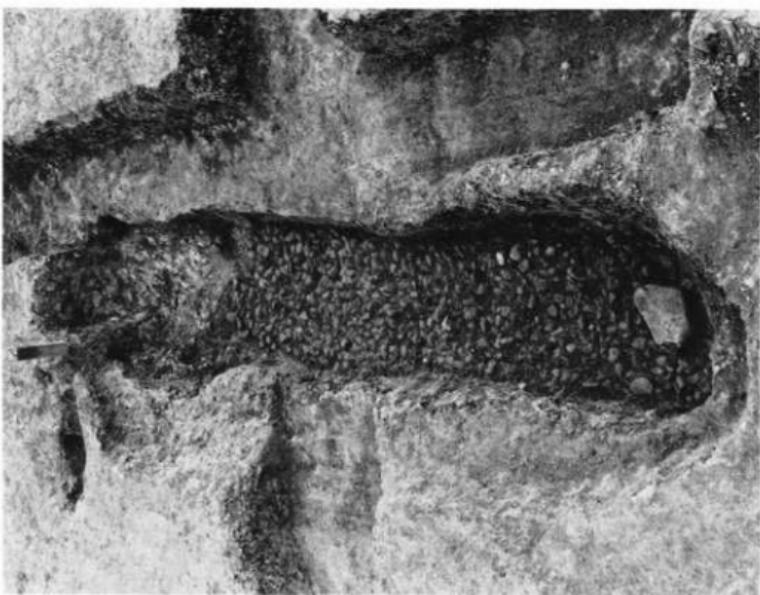
2号墳主体部上部検出状況



同 上



墓壙検出状況（手前が北）



墓壙検出状況（右側が北）



墓壙（石除去後）



石囲土壤検出状況



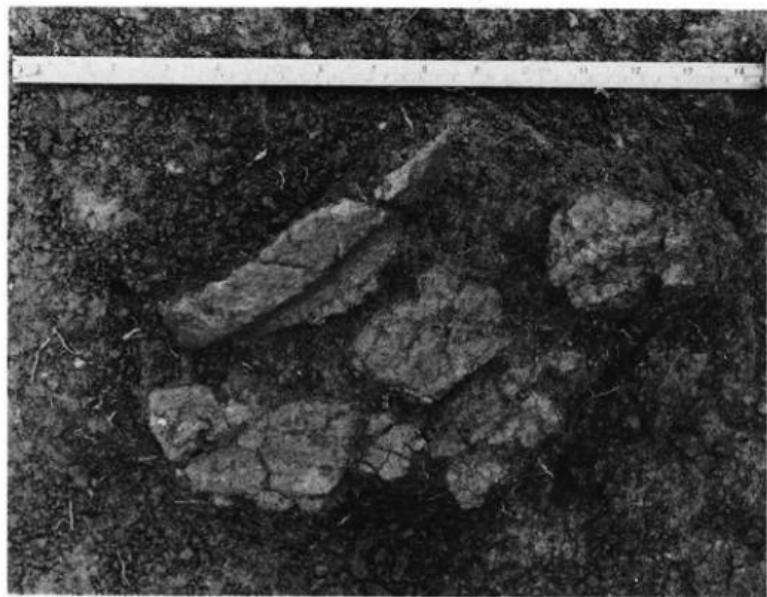
石囲土壤内部（石除去後）



第2調査区発掘風景



第3調査区調査完了



1号墳南東裾土器出土状態



土器接合後



五輪塔検出状況



五輪塔復元後

小丸山古墳群

昭和61年3月発行

発 行 松江市教育委員会

印 刷 有限会社谷口印刷

松江市母衣町89